様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ９ 月 ２３ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００２２

研究課題名（和文）占領期の美術と冷戦―日本、ドイツ、アメリカ

研究課題名（英文）Art in the Period of Occupation and Cold War: Japan, Germany and the United States

研究代表者
五十殿　利治（OMUKA, Toshiharu）

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：６０１７７３００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は敗戦後の日本における美術状況について、アメリカを中心とする連合軍による占領期という視点を導入して、新たな照明を当てるものであり、従来の「戦後美術」という概念を補完することを目指すとともに、日本と同じように、枢軸国として敗戦により大きな社会変革を経験したドイツを比較考量した結果、各種の民主主義的な情報発信と文化宣伝を行う、共通する文化戦略の拠点整備（アメリカ・ハウス、CIEライブラリー）を確認した。なお、これは米軍施政下の南朝鮮でも同様であった。一方で、見逃せないこととして、日本とは異なり、ドイツでは戦前のモダニズム排斥を回復する動向が美術展などでも顕著に見られる。

研究成果の概要（英文）：This study sheds new light on the postwar situation of Japanese art from a new viewpoint of the period of allied occupation led by the United States and complement the concept of the so-called Postwar Art. This study also compares the Japanese situation with the German one where took place a similar wide scale of social change after the war defeat as the Axis and finds common policies to establish cultural centers offering various democratic information including art and cultural propaganda: 'Amerika Haus' and CIE Library. The same is true of South Korea under the government of the US army. While in Germany unlike in Japan, there was a strong trend in art exhibitions to recover from the prewar radical movement of anti-modernism.

研究分野：美術史

キーワード：占領期　美術　冷戦

１．研究開始当初の背景

日本の敗戦後の美術史については実証的研究が盛んになりつつある。占領期のGHQ/SCAP(連合国最高司令官総司令部)に関する資料のほか、プランゲ文庫など検閲関係資料も公開される一方、戦争画の取り扱い、帝室博物館・国立博物館の活動など、精緻な資料解読と分析に裏打ちされた成果が出ている（河田明久、「「それらをどうすればよいのか」－米国公文書にみる「戦争記録画」接収の経緯」、1999 年、朴炫昭『「戦場」としての美術館 日本の近代美術館設立運動/論争史』、2012 年）。

こうした研究が明らかにするのは GHQ の関与であるとともに、冷戦期を迎えるアメリカの占領政策である。その一方で、国内でも他分野では成果があるが（貴志俊彦・土屋由香、『文化冷戦の時代　アメリカとアジア』、2009 年）、国際的には戦後という枠組みではなく「冷戦期」の美術研究が顕著な形で進展している。「分割された国家」の美術をテーマとした先駆的な展覧会(Deutschlandbilder, 1997) を始め、東欧全体を見渡した Piotrowski の著作(In the Shadow of Yalta, 2009)、冷戦期ドイツ美術を正面から取り上げた展覧会 Kunst und Kalter Krieg（2009）等がある。

はたして日本とドイツは敗戦、占領、冷戦という時代を経験した。アメリカの占領政策と外交戦略に直面した日本とドイツの美術について検討することは、「戦争後 post-war」の美術を規定していた機構とはなにかを改めて問うことになる。

２．研究の目的

アジア太平洋戦争敗戦後の美術史研究は着実に進展しているが、国際的な視点からの考察は、占領によって、日本全体があたかも GHQ/SCAP に包み込まれていたために、日米関係という枠を超えられないきらいがある。本研究ではこの占領そしてそれと密接な関わりのある冷戦という視点を設定した上で、アメリカをいわば中点として、日本とドイツにおける戦後の美術を比較研究することを試みる。それは同時代美術、同時代作家だけではなく、たとえば美術品の接収や返還において、洋の東西や時代を問わない名作、美術館・博物館、文化行政など、広範な事象が研究調査対象となる。

本研究が目指すのは、国際的な比較研究の端緒となるプラットフォームの構築であり、その成果を土台として、さらに広い展望を開く発展研究の可能性を探ることである。

３．研究の方法

本研究では以下の方法により目的を達成する。

(1)日本、ドイツ、アメリカの 1940 年代から 50 年代にかけての美術について専門的な研究を進める美術史研究者の交流を積極的に進め、問題意識の共有化を図る。

(2)GHQ/SCAP における美術記念物課や民間情報教育局、また OMGUS における MFAA の動向についてアーカイブ資料を活用し、とりわけ占領政策と美術活動の関係について考察を深める。

(3)研究成果について機会を捉えて学会発表を行い、研究の方向性を検証するため、フィードバックを図る。

(4)最終年度における国際的なワークショップについて十分な準備の上で実施し、研究基盤の構築を図り、さらに発展研究の展望を得るように努める。

４．研究成果

占領期の美術活動において、欧米の動向をどのように接することになったのか、という問題は、出版物の検閲、プレスコードが設定されるなど、敗戦後の出版報道界を念頭においてみると、ゆるがせに出来ない問題である。

今日、戦後美術史として論じられる場合、この時期は戦争責任の問題や、いかに美術団体が再編されたのか、といった点に焦点が絞られる傾向が顕著であり、「占領下」といった視点がほとんどなく、シームレスな美術史的な記述が見受けられる。おそらく、例外的に、戦争画の取扱があるが、これは長く占領終了直前まで、東京都美術館の中央に保管された状態であって、その後紆余曲折を経て、無期限貸与として米国から返ってくるまでは、まさに秘匿されたままであった。つまり、占領という事態が露出するということがなかったのである。

そこで、本研究の一つの課題において、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）の民間情報教育局が設置した CIE 図書館については、これまでも図書館学を中心にして調査研究が進められていたが、今回の研究においては国会図書館で閲覧できる日本占領期関係文書から全国に展開する CIE（Civil Information and Education）図書館（図書館は通称であり、正式には Information Center 情報センターである）に向けられた通信 Branch Library Bulletin などの資料を発掘することで、アメリカ美術を、つまり民主的な美術の普及を、日本社会に向けて、複製画を活用して展示会を行い、促進しようとしていたことが判明した。研究では一部の複製画の入手に関する経緯が占領軍文書によって判明し、複製作品も特定することができた。しかも、その展示会の一つは、国立博物館表慶館（現東京国立博物館）において実施されていた。

また、とくに利用者が多く、関係資料も多いと想定される東京日比谷の CIE 図書館について調査を進めた。まず建物であるが、戦前

の日東紅茶の建物を再利用したものであるが、建築当初の写真等を建築雑誌で把握し、また改築後の鮮明な写真も入手したことで、どのような改築が行われたかが推定されるとともに、図書館として、どこにどのような雑誌図書、とくに米国の美術雑誌が配架されていたかを確認することができた。また、従来、米国の出版物だけという通念があったが、実際には連合国に新聞雑誌が配架されていた時期があった。

また、本研究に関連して、研究協力者の申政勳の論文によって、CIE 図書館については、米国施政下にあった朝鮮半島においても同様な活動があったことが確認できた。その主体となったのは在韓米軍 USAFIK の文化情報部 OCI(Office of Cultural Information)であり、ソウルに加え、チョンジュなど各地にセンターが配置された。実際には、この OCI、そして在韓米国軍政府 USAMGIK の公共情報課 DPI(Department of Public Information)が、宣伝活動を実践した。やがて、朝鮮戦争が勃発することになるが、ここで、CIE 図書館と同様な宣伝活動が展開されることになったのである。

米軍に関連する展覧会活動という点でいえば、そこで生じた人脈が戦後の日本美術史において、大きな影響を及ぼしていることが知られている。研究協力者桑原規子の研究においては、戦前からドイツに留学し、帰国後は美術史研究者として美術研究所に所属し、敗戦後も海外での美術館長を経験し、さらには国立西洋美術館長を務めることになる山田智三郎が、占領期には、「展覧及び講演部長」としてアメリカ陸軍教育センターArmy Education Center の活動に協力して、その人脈もあって、日米美術交流の「立役者」となり、とりわけサロン・ド・プランタン顧問、版画家の渡米などにおいて、戦後の版画界の発展のために、大いに貢献したことが明らかにされた。

連携研究者の安松みゆきは、占領期ドイツの美術動向について、研究を進めた。第二次世界大戦後、旧枢軸国は敗戦国として占領期を体験するが、それは全体主義や軍国主義のもとで戦争を起こした当事国において、政治から文化にいたる幅広い対象の改変が目指された時代である。当然のことながら、美術もまた戦前の体制との関係を問われることになった。

日本に比べてドイツは、美術への政治介入が極めて露骨であり、略奪、排除、売却、破壊などの行為を伴ったので、占領期の動向もそれに応じて一層鮮明な形になっている。具体的には、戦前において重要な文化都市と位置付けられていたミュンヒェンでの戦後美術復興の実情の一端を明らかにすることを目的に据えた。ナチス政権下では極端な美術政策が押し進められたので、現代美術の評価が賞賛と否定の両極に分かれた。それゆえに戦後占領期の検討でも、賛美された傾向と否定された傾向のそれぞれについて、評価や処遇を追うことにより、戦前と戦後の関係を整理することができる。

一つの課題は、ナチス時代に賞賛された現代美術がどのような流転を経験することになるのかであり、女流画家ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ Cäcilie Grar-Pfaff の作品《イタリアのホーエンシュタウフェンブルク》Hohenstaufenburg in Italien を対象として事例研究を進めた。この作品はナチス推奨の美術を展示する「大ドイツ美術展 Große Deutsche Kunstausstellung」の 1939 年展に出品され、さらにはヒトラーに買い上げられており、ナチス時代において高い評価を受けた作品の一例と見なし得るものである。画家は日本とも深い関わりを持ち、鴎外の『独逸日記』にも登場する人物で、生涯にわたって日本美術への関心を持ち続けてドイツにおける紹介に尽力した。

この作品をめぐっては、美術評価の変化を象徴するものとして戦前から戦中を経て占領期、さらに現在にいたる作品の流転それ自体を追う作業を進めた。今回の調査ではコブレンツのドイツ連邦文書館の史料 B323 Archiv Nr.91,182,613 から、この作品がミュンヒェンの総統官邸からアルトアウスゼーに直接に運び込まれたのではなく、その前にオーストリアのケルンテン州にある中世の古城マンスベルク城に疎開されていたことがわかった。1944 年 10 月にアルトアウスゼーへの移送は、空襲を避けて安全な場所へ移したと考えられた。その後作品は、1999 年にはミュンヒェンの大蔵省の倉庫に、現在はベルリンの歴史博物館の所蔵になっており、いずれも美術品としてではなく、歴史史料として保管の対象になっている。

第二の課題として、ナチスによって否定された美術の占領期の事情を検討した。その際にナチス時代に建設されて前述のナチスによる「大ドイツ美術展」の会場となった「ドイツ美術の家」を考察の場として選んだ。

最初に開かれた 1946 年の「15、16 世紀のバイエルンの絵画展」では、ナチス時代にも高く評価された名品を「未来へと向かう自由で生き生きした美術」としてナチスの抑圧的な伝統回帰と決別した。その翌年のフランスの近代絵画の展覧会では、ナチス時代に否定されたマティス、シャガールらを主役として展示し、ミュンヒェンの美術はフランスからの影響を受けた歴史を持つことを展覧会図録で強調し、ここでもナチスの偏狭な伝統主義を克服しようとした。その後 1948 年の「ベルリン・皇帝フリードリヒ美術館の巨匠展」はアメリカで保管されていた作品の里帰りであり、これをきっかけに各作品がドイツに返還された。

戦後最も大きな意味を持つ展覧会は、1949 年に開催された「青騎士 ミュンヒェンと 20 世紀の美術展 Der Blaue Reiter, München und die Kunst des 20. Jahrhunderts, Der Weg von

1908-1914」である。この青騎士を取り上げ、ナチス美術の殿堂に展示することは、上記のフランス近代絵画以上に、ナチスの美術政策の否定を強く印象づける意味を持った。「ドイツ美術の家 Haus der Deutschen Kunst」を存続させて近代美術復権の場にし、そのことでこの施設も脱ナチ化されるというコンセプトが確立されたのである。この展覧会を組織したのは、ナチス時代に地位を剥奪されていた美術史家ルートヴィヒ・グローテ Rudwig Grote であった。その後、「青騎士展」と一連の美術展として 1950 年の「バウハウス展 Die Maler am Bauhaus」と「オスカー・ココシュカ展 Oska Kokoschka, Aus seinen Schaffen 1907-1950」が開催され、青騎士のカンディンスキーとクレーの作品は「青騎士展」と重複しない、多数の作例を展示して、二人を近代美術復権の基軸に据えた。「ココシュカ展」では、ココシュカは存命の画家であり、展覧会図録にも所感が掲載され、再評価の意義は大きかった。さらにナチスに否定されて「退廃美術展 Entartete Kunst」に展示されたかれの作品《異邦人》と《風の花嫁》が、「ドイツ美術の家」に飾られた。それによって近代美術の復権を確固たるものとしたことが理解された。

連携研究者の江口みなみも、戦後ドイツにおける美術館を対象として調査研究を行った。

ナチス政権による美術館の全国的な統制が崩壊した戦後ドイツでは、さまざまな環境のもと再編や活動再開が行われたため、その状況を概観して捉えることは難しい。本研究では、ライデマイスター（Leopold Reidemeister, 1900-1987）という人物の活動を中心に見ながら、公設美術館の復興プロセスについて詳しく検証することとした。ライデマイスターの事例がとりわけ興味深い理由として、つぎの二点を挙げることができる。第一に、彼はベルリン国立美術館群の総長であったボーデ（Wilhelm von Bode）の親戚であり、なかば特権的な立場であったこと。第二に、彼がベルリン東アジア美術コレクション Ostasiatische Kunstsammlung 担当の学芸員として務めていた際に、ナチス政権に非常に協力的であったキュンメル（Otto Kümmel）の部下であった点である。本研究では、これらの要素が戦後の混乱期にどのような効果を持ったのか、資料や文献から分析を試みた。

ライデマイスターは、終戦直後からケルンにおいて公設美術館の再建に携わったが、公的な職へ復帰する際に「非ナチ化 Ent-nazifizierung」の審査を受ける必要がなかったと述べている点は注目に値する。彼は、1939 年に開催された「伯林日本古美術展覧会」の運営をはじめとして、ナチス政権の文化政策に直接関係するような仕事に従事していた。前述のキュンメルとの距離を考えても、独裁政治への貢献が多少なりともあったと言わざるを得ない。結果としてライデマイスターは「審査の必要なし」と判断されたが、彼の周辺では長期にわたって「非ナチ化」に関する法的な争いが起きたこともあり、美術館における新体制の形成が一筋縄ではいかなかった状況が推察される。職業と思想の両面を公平に審査し、一定の線引きをすることは難しく、また各占領国の指針が反映されたため、各地域で判断基準の食い違いが起きていた。さらにナチス政権によって「退廃芸術」とされた作品などを美術館へ戻し、「名誉回復 Wiedergutmachung」を行うことが喫緊の課題となったため、美術館は設備や人員が整わないまま保存・修復・展示活動を再開する必要があった。東アジア美術を専門としていたライデマイスターが、西洋のモダン・アートを扱うようになったことも、こうした事情に起因する。

さらに、ライデマイスターは 1957 年に西ベルリンの国立美術館群総長としてベルリンへ戻ることとなったが、政治的な緊張の高まる特殊な都市での美術館運営には、また別の難しさがあった。美術館の再建を含む東西ベルリンの都市計画は、それぞれの思想や理想を体現したものであり、「壁の向こう側」へのアピールという役目も担っていたからである。本研究では、そうした複雑な事情のなかで公設美術館の舵取りを任せられたライデマイスターの苦悩や、具体的な対応について丁寧に見ることで、美術館の現場ではどの程度の制約や自由があったのか、明らかにすることができた。東独の状況など不明な点もまだ多く残されているが、戦後ドイツの混乱期における美術館の活動について、複数資料の照合により分析を進める研究手法の有効性が確認できたと言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　9　件）

①五十殿利治、戦後 70 年の美術展をめぐって――戦争と戦争体験、平成 26 年度～28 年度　科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究　研究成果報告書　占領期の美術と冷戦―日本、ドイツ、アメリカ、2017、7-14、査読なし

②安松みゆき、占領期ミュンヒェンの「芸術の家（旧ドイツ芸術の家）」で開催された「バウハウス展」と「オスカー・ココシュカ展」、平成 26 年度～28 年度　科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究　研究成果報告書　占領期の美術と冷戦―日本、ドイツ、アメリカ、2017、15-20、査読なし

③江口みなみ、戦後ドイツの公設美術館とその社会的役割―学芸員ライデマイスターの活動を通して、平成 26 年度～28 年度　科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究　研究成果

報告書　占領期の美術と冷戦―日本、ドイツ、アメリカ、2017、21-25、査読なし

④桑原規子、山田智三郎と戦後の在日欧米人ネットワーク、平成 26 年度～28 年度　科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究　研究成果報告書　占領期の美術と冷戦―日本、ドイツ、アメリカ、2017、26-38、査読なし

⑤SHIN Chunghoon、Winning the hearts and minds of Korean artists: The US, the Cold War, and Korean Art、平成 26 年度～28 年度　科学研究費補助金　挑戦的萌芽研究　研究成果報告書　占領期の美術と冷戦―日本、ドイツ、アメリカ、2017、39-45、査読なし

⑥安松みゆき、戦後ドイツの美術復興の一考察：占領下ミュンヒェンの「芸術の家」の展覧会を事例として、別府大学大学院紀要　18 号、2016、57-63、査読あり

⑦安松みゆき、ドイツにおける終戦間際の美術作品の行方をめぐって：ヒトラー購入作品《イタリアのホーエンシュタウフェンブルク》を例に、別府大学大学院紀要、17 号、2015、51-57、査読あり

⑧五十殿利治、CIE 図書館と敗戦後の美術情報、インテリジェンス、15 巻、2015、50-58 査読なし

⑨五十殿利治、「占領期の美術展と展示空間」について、近代画説、23 巻、2014、14-19、査読なし

〔学会発表〕（計　1　件）

五十殿利治、CIE 図書館と占領下の美術、20 世紀メディア研究所、86 回研究会、2014 年 9 月 27 日、早稲田大学、東京都新宿区

６．研究組織

(1)研究代表者

五十殿　利治（OMUKA, Toshiharu）
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：60177300

(3)連携研究者

安松　みゆき（YASUMATSU, Miyuki）
別府大学・文学部・教授
研究者番号：40331095

江口　みなみ（EGUCHI, Minami）
早稲田大学・文学学術院・日本学術振興会特別研究員
研究者番号：90753210

(4)研究協力者

桑原　規子（KUWAHARA, Noriko）
申　政勳（SHIN, Chunghoon）